# 「本稿は扱わない」と書くことは、反証を逃がしているのか、的を絞っているのか

— **524** 編のうち **516** 編が射程注記を持ち、「ない」で終わる宣言は **3649** 件 — 対象を狭める宣言 **978** 件に対し、主張の強さを下げる宣言が **728** 件ある — [論文526]

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)
Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan｜山岸勇輝ラボ
2026年9月

*— From thinking to syncing. —*

**要旨**

この体系はほぼ全編に「本稿は扱わない」で始まる射程注記を置いている。本稿が示すのは、その注記が二種類に分かれ、片方は反証の的を絞り、片方は主張そのものを小さくしていることである。どちらが良いかは判定しない。数を出して、判断は著者に返す。新しい定理も法則も主張しない。 第一に、**524** 編のうち **516** 編、**98.5** パーセントが射程注記を持つ——「ない」で終わる宣言は合計 **3649** 件で、一編あたり最小 **1**、中央 **8**、最大 **14** である（第2節）。 第二に、これが本稿の芯である。持たない **8** 編は、すべて最初期の編である——番号 **1・2・8・12・19・20・61・62** であり、途中から採られた作法であって、批判に応じて足されたものではない（第3節）。 第三に、宣言が最も少ない **1** 件の編は、再採番と空き番号を埋めた編である——番号 **23・25・31・36・37** であり、最多の **14** 件は番号 **269・275・281・301・314** である（第3節）。 第四に、語族で分けると、対象を狭める宣言が **978** 件、主張の強さを下げる宣言が **728** 件、手続きを断る宣言が **283** 件である——前者は的を絞り、後者は的を小さくする（第4節）。 第五に、体系は「反証可能」を **7** 編で名乗るが、ポパーもラカトシュも **0** 編である——「防御帯」は **1** 編にあり、論文481 が「判定は著者に返す」と書いて席を空けている（第4節）。 第六に、分離子は「注記を外したら主張が増えるか」である——増えるなら的を絞っており、増えないなら初めからそこまでしか言っていない（第5節）。 キーワード：射程注記、反証可能性、論文体系の点呼、ポパー、ラカトシュ。

本稿の射程（射程注記）：新しい定理も法則も主張しない——ポパーの反証可能性も、ラカトシュの防御帯と硬い核も標準的な語である。体系を擁護しない——数を出すところまでが本稿であり、射程注記が防御帯か硬い核かの判定は著者に返す。本稿はその判定をしない。科学哲学の論争を裁定しない——ポパーとラカトシュのどちらが正しいかは主題ではない。自動判定を作らない——語族による集計は候補を出すためのものであり、一件ずつの分類は読んで決めるべきものである。本稿の三分類は目安であって判定器ではない。他の著者の作法と比べない——この体系の中だけを数えた。学術一般の射程注記の頻度は測っていない。注記の質を評価しない——よく書けているかどうかではなく、何件あってどの型かだけを数える。改訂の履歴までは追わない——注記が初版からあったか後から足されたかは、本稿では編ごとの有無からしか見ていない。既刊との関係：論文481 は「法則が破れた」がどの仮定へも落とせると示し、射程注記が防御帯か硬い核かの判定を著者に返すと明記した——本稿はその席に入り、判定の材料になる数を出す。判定はやはり返す。論文200 は体系を体系自身のデータとして測った——本稿も同じ手つきで、測る対象を作法に取る。論文400 は数えた道具のほうが先に壊れたと示した——本稿の語族の集計も道具であり、判定器にしてはならない理由がそこにある。論文500 は体系の作法が一つではなく、それぞれ別の時期に採用されたと示した——本稿の 8 編はその具体例である。論文300 は同根か別根かが判定できると示した——二種類の注記は「量の持ち物」の基準で別根である。加えたのは、射程注記の有無を全編で数えたこと、持たない 8 編を名指したこと、宣言の数の分布（最小 1・中央 8・最大 14）を出したこと、語族ごとの件数を出したこと、分離子を「外したら主張が増えるか」に置いたことである。

## 1. 記法と問い

設定：ポパーは、科学の命題を非科学から分けるのは反証可能性だと言った。ラカトシュはそれを研究計画に広げ、変えてはならない硬い核と、反証を受け止めて書き換えられる防御帯に分けた。

体系の作法：この体系はほぼ全編で、要旨の直後に「本稿は扱わない」「主張しない」で始まる短い注記を置いている。これを射程注記と呼ぶ。

> **観察 1.1**
>
> 同じ形の文が、二つの逆の働きをしうる。「この場合は扱わない」は、残りについての主張を鋭くする——一方「そこまでは主張しない」は、主張そのものを小さくする。

> **観察 1.2**
>
> ラカトシュの語でいえば、前者は硬い核を露出させ、後者は防御帯を厚くする。どちらも「ない」で終わる同じ文型である——見た目では分からない。

問い：この体系の **3649** 件は、どちらなのか。

## 2. まず数える

**計算 2.1**：2026 年 9 月 10 日の時点で、番号の付いた全編を走査した。

| 量 | 値 |
|---|---|
| 走査した編 | **524** 編 |
| 射程注記を持つ編 | **516** 編（**98.5** パーセント） |
| 「ない」で終わる宣言 | **3649** 件 |
| 一編あたり 最小 | **1** 件 |
| 一編あたり 中央 | **8** 件 |
| 一編あたり 最大 | **14** 件 |

> **観察 2.2**
>
> ほぼ全編が持っている。**98.5** パーセント——これは個々の編の判断ではなく、体系の作法である。作法であるなら、個別の批判への応答ではない。

> **観察 2.3**
>
> 分布に幅がある。最小 **1** 件から最大 **14** 件まで——全編が同じ数を並べているのではない。中央は **8** 件である。

> **観察 2.4**
>
> 数えたのは日本語版だけである。英語版は文型が違うので同じ数え方が当たらない——比較のためには別の数え方が要る。本稿はそこまでしていない。

## 3. 持たない八編が教えること

計算 3.1：射程注記を持たない 8 編を名指した。

| 編 | 主題 |
|---|---|
| 番号 1・2 | $n = 2$ と $4\pi$（体系の土台・一本も引用しない二編） |
| 番号 8 | $n = d - 1$ への一般化 |
| 番号 12 | $E = 4\pi c^2$ |
| 番号 19・20 | 圧力と温度の側 |
| 番号 61・62 | 光球と体積の双対 |

> **観察 3.2**
>
> これが本稿の芯である。持たない 8 編は、すべて最初期の編である——射程注記は途中から採られた作法であって、特定の批判に応じて足されたものではない。

> **観察 3.3**
>
> これはラカトシュの意味では区別に効く。防御帯の書き換えは、反証に出会ったあとに起きる——全編に一律に置かれた注記は、反証に出会う前に置かれている。時間の向きが違う。

> **観察 3.4**
>
> ただし、これで「防御帯ではない」とは言えない。あらかじめ広く張った網も、結果として反証を逃がしうる——時期は必要条件を一つ潰しただけで、十分条件ではない。

> **観察 3.5**
>
> 宣言が最も少ない編にも規則性がある。1 件しか持たないのは番号 23・25・31・36・37——再採番された編と空き番号を埋めた編である。作法の変わり目に書かれた編ほど注記が薄い。

**観察 3.6**

最も多い編は **14** 件である。番号 **269・275・281・301・314**——最大でも **14** で止まっており、際限なく増えてはいない。

**観察 3.7**

**論文500** の具体例になっている。あちらは体系の作法が一つではなく、それぞれ別の時期に採用されたと示した——射程注記もその一つであり、採用の時期が編の番号として残っている。

## 4. 二つの語族

**計算 4.1**：宣言を語族で分けて数えた。これは候補を出すための集計であって、判定器ではない。

| 語族 | 件数 | ラカトシュの語では |
|---|---|---|
| 対象を狭める（扱わない・立ち入らない） | **978** | 的を絞る |
| 主張の強さを下げる（主張しない・呼ばない） | **728** | 的を小さくする |
| 手続きを断る（論じない・判定しない） | **283** | どちらにもなりうる |

**観察 4.2**

どちらか一方ではない。**978** 対 **728**——「全部が防御帯だ」も「全部が硬い核だ」も、この数とは合わない。

**観察 4.3**

働きが逆である。対象を狭める宣言は、残った範囲での主張を強くする——「$\beta$ が小さいときだけ」と書けば、$\beta$ が大きいときに外れても反証にならない代わりに、$\beta$ が小さいときに外れたら逃げ場が無い。

**観察 4.4**

主張の強さを下げる宣言は、逆に効く。「新しい定理も法則も主張しない」は **524** 編のほぼ全部にある——これは反証の的を小さくしている。反証されうるものが少ないほど、反証されにくい。

**観察 4.5**

体系は「反証可能」を **7** 編で名乗る。ポパーもラカトシュも **0** 編、「防御帯」は **1** 編——その **1** 編が論文**481** で、判定を著者に返すと書いている。本稿はその席に入るが、判定はやはり返す。

**観察 4.6**

語族の集計は道具にすぎない。一つの文が二つの働きを兼ねることがある——論文**400** が「数えた道具のほうが先に壊れた」と書いたとおりで、この三分類も一件ずつ読めば動く。判定器にしてはならない。

## 5. 分離子

**観察 5.1**

分離子は、注記を外したら主張が増えるかである。増えるなら、注記は的を絞っていた——増えないなら、初めからそこまでしか言っていない。

**観察 5.2**

この分離子は、一件ずつなら実際に試せる。注記を消して残りの本文が矛盾するか、変わらないかを見ればよい——機械にはできないが、読めば決まる。本稿はその手続きを提案するところまでである。

**観察 5.3**

論文**300** の「量の持ち物」の基準で別根である。的を絞る注記は「どの範囲か」という持ち物を要り、的を小さくする注記は要らない——同じ「ない」で終わる文でも、必要な持ち物が違う。

> **観察 5.4**
>
> 判定はしない。**978** 対 **728** という数と、**8** 編が最初期だという事実を並べた——この体系の射程注記が防御帯か硬い核かは、著者が決めることである。本稿は材料を置くだけである。

> **観察 5.5**
>
> 言わないこと。他の著者の作法とは比べていない——学術一般で射程注記がどれくらいの頻度かは測っていないので、**98.5** パーセントが多いのか少ないのかは言えない。

## 6. 点呼と結び

1. **524** 編中 **516** 編が持つ（計算 2.1）：**98.5** パーセント。
2. 宣言は **3649** 件（計算 2.1）：最小 **1**・中央 **8**・最大 **14**。
3. 持たない **8** 編は最初期（計算 3.1）：本稿の芯。
4. 番号 **1**・**2** は引用も持たない（計算 3.1）：土台の二編。
5. **1** 件しか持たない編は再採番と空き埋め（観察 3.5）：作法の変わり目。
6. 最多は **14** 件（観察 3.6）：際限なく増えてはいない。
7. 対象を狭める **978** 件（計算 4.1）：的を絞る。
8. 主張の強さを下げる **728** 件（計算 4.1）：的を小さくする。
9. 「反証可能」**7** 編・ポパー **0** 編（観察 4.5）：語が無いのに実質がある。
10. 分離子は外したら主張が増えるか（観察 5.1）：読めば決まる。
11. 判定は著者に返す（観察 5.4）：本稿は材料まで。

結び：この体系はほぼ全編に「本稿は扱わない」で始まる射程注記を置いている。まず数えた——2026 年 9 月 10 日の時点で **524** 編のうち **516** 編、**98.5** パーセントが射程注記を持ち、「ない」で終わる宣言は合計 **3649** 件、一編あたり最小 **1**、中央 **8**、最大 **14** である。全編が同じ数を並べているのではなく、分布に幅がある。数えたのは日本語版だけで、英語版は文型が違うので同じ数え方は当たらない。持たない八編が、時期を教える——番号 **1**・**2**・**8**・**12**・**19**・**20**・**61**・**62** で、すべて最初期の編である。射程注記は途中から採られた作法であって、特定の批判に応じて足されたものではない。ラカトシュの意味ではこれは効く。防御帯の書き換えは反証に出会ったあとに起きるが、一律に置かれた注記は出会う前に置かれている。時間の向きが違う。ただしこれで「防御帯ではない」とは言えない。あらかじめ広く張った網も結果として反証を逃がしうるので、潰れたのは必要条件が一つだけである。宣言が **1** 件しかない番号 **23**・**25**・**31**・**36**・**37** は再採番と空き番号を埋めた

編で、作法の変わり目に書かれた編ほど注記が薄い。最多は **14** 件で、際限なく増えてはいない。語族で分けると、働きが逆の二群がある——対象を狭める宣言が **978** 件、主張の強さを下げる宣言が **728** 件、手続きを断る宣言が **283** 件である。前者は的を絞る。範囲を書けば、その範囲の中で外れたときに逃げ場が無くなる。後者は的を小さくする。「新しい定理も法則も主張しない」はほぼ全編にあり、反証されうるものを減らしている。「全部が防御帯だ」も「全部が硬い核だ」も、**978** 対 **728** という数とは合わない。分離子は、注記を外したら主張が増えるかである——増えるなら的を絞っており、増えないなら初めからそこまでしか言っていない。これは一件ずつなら実際に試せる。注記を消して残りの本文が矛盾するかを見ればよい。機械にはできないが、読めば決まる。論文**300** の「量の持ち物」の基準でいえば、的を絞る注記は「どの範囲か」を要り、的を小さくする注記は要らない。同じ文型でも持ち物が違う。体系は「反証可能」を **7** 編で名乗るのに、ポパーもラカトシュも **0** 編で、「防御帯」は論文**481** の **1** 編だけにある。その編が判定を著者に返すと書いており、本稿もそこは変えない。正直に言えば——本稿は判定をしていない。**978** 対 **728** という数と、**8** 編が最初期だという事実を並べただけである。語族の集計は候補を出す道具であって判定器ではなく、一つの文が二つの働きを兼ねることがある。論文**400** が書いたとおり、数えた道具のほうが先に壊れる。他の著者の作法とも比べていないので、**98.5** パーセントが多いのか少ないのかも言えない。注記の質も評価していないし、初版からあったか後から足されたかも編ごとの有無からしか見ていない。言えるのは、同じ文型の下に働きの逆な二群があり、その比が **978** 対 **728** である、そこまでである。

## 参考文献


1. Duhem, P. (1906). *La Theorie physique: son objet et sa structure*. Chevalier et Riviere.
2. Lakatos, I. (1970). *Falsification and the Methodology of Scientific Research Programmes*. In I. Lakatos & A. Musgrave (Eds.), Criticism and the Growth of Knowledge. Cambridge University Press.
3. Popper, K. R. (1959). *The Logic of Scientific Discovery*. Hutchinson.
4. 山岸勇輝 (2026).『二百本目の点呼 ── 体系を、体系自身のデータとして測る』[論文200]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22108829
5. 山岸勇輝 (2026).『三百本目の点呼 ── 同根か別根かは、判定できる』[論文300]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22171914
6. 山岸勇輝 (2026).『四百本目の点呼——数えられたものより、数えた道具のほうが先に壊れた』[論文400]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22699343
7. 山岸勇輝 (2026).『「法則が破れた」は、どの仮定へも落とせる』[論文481]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22733927
8. 山岸勇輝 (2026).『第五百回の点呼 ── 体系の作法は一つではなく、それぞれ別の時期に採用された』[論文500]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22760262


*— From thinking to syncing. —*


**山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)**



© 2026 Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan · Licensed under Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0)